

平川虎臣の戦後小説の出発

『鬪鷄』を中心に

木村 一信

平川虎臣「年譜」の△昭和十九年（一九四四）▽の項を見ると、次のような記事がある。

三月初め、健康を害したのと戦時中の児童の縁故疎開のため妻だけを東京に残して子供と一緒に熊本郷里に
戻る。

ここで、「妻」と記されているのは、現在、熊本県鹿本郡菊鹿町に御健在の平川虎臣未亡人、サキ子夫人のことである。この時、サキ子夫人は東京都杉並区和田国民学校訓導として勤務されていた。平川虎臣は、この時、原稿や書籍、その他の文筆活動に関しての資料をほとんど東京の夫人の元に置いたまま、「郷里」に帰ったのである。いざずれ、東京に戻るとの思いがあったのであろう。しかし、折からの時局の悪化に伴い、サキ子夫人の実家からの促しもあって、同年七月、夫人も夫から託せられていた資料類を送ると共に、熊本に引きあげ、鹿本郡の内田国民学校に勤めることになる。

虎臣が文学の志を抱いて上京したのが、大正十三年（一九二四）九月、二十一歳の時である。それからちょうど二十年経って、昭和十九年（一九四四）、四十一歳で虎臣は帰郷した。もちろん、この間、二・三度の東京と熊本との往還はあったが、生活の場として「郷里」に足を踏み入れたのは二十年ぶりであったのだ。

そして、この二十年間のうち、特に後半十年間は平川虎臣にとって、いわゆる文壇での活躍という点から、その生涯において最も華華しい期間であった。それは、昭和九年（一九三四）七月の『中央公論』臨時増刊新人号における『生き甲斐の問題』入選から幕が開いた。同時入選作とその作者は『盲目』（島木健作）、『贅肉』（丹羽文雄）、『無風帯』（石川鈴子）であり、「婦人作家」輩出の気運に乗った感のある石川は別として、島木健作、丹羽文雄と言え、当時、すでにその才筆を高く評価され始めていた。平川の入選は、作品によって実力を認められたものと言えるだろう。

この後、虎臣の文学的活動は、昭和十三年（一九三八）の『手紙』発表とそれに対しての川端康成による讃辞²⁾、翌年の『神々の愛』（新潮社）刊行と続いていき、以下、『愛情浪漫』（昭15）『花と門』（同）、『街にゐる鴛』（昭16）、『生命歌』（昭17）『生き甲斐』（同）『西方の忠臣』（同）、『野の太陽』（昭18）『吹き過ぐる風』（同）という具合に次々と書き下ろし、作品集の出版が相つぐのである。もちろん、これ以外に諸文芸雑誌に多くの作品を発表している。こうした、いわば油の乗った只中で帰郷は、ずい分と後髪の引かれる思いが虎臣の心中にはあったことと思われる。しかしながら、それだけ戦局は悪化していたとも言える。昭和十八年十二月に、政府閣議は都市疎開実施要綱を決定しているし、同じ月、文部省は学童の縁故疎開を強力に推進することを指示した³⁾のである。東京大空襲はその前年にすでに始まっていた。この時局の厳しさという状況に加え、平川は昭和十八年の秋、急性肋膜炎の兆候をあらわし、血痰を吐いたりもしている⁴⁾。大都市東京の危険な情勢と健康を害したことが、旺盛な創作活動を一時休止させかねない帰郷へと平川を向かわしめた理由であろう。

熊本に帰った年の四月、平川は『母郷』を刊行している。十四の短篇小説からなるこの作品集は、おそらく著者の思想にはなかったことと推察されるが、平川生前の最後の単行本出版となるのである。やがて、戦争は末期的状況に入り、翌二十年（一九四五）八月の敗戦へと進んでいく。

戦後の平川は、文学上の恩師上司小剣の葬儀に参列する

ために上京（昭22）したりすることはあったが、ついに再び東京に住居をかまえて文筆活動を行うことはしなかった。かつての文学仲間からの上京の慫慂や平川自身の再活躍への意欲もなくなかったようだが、それを実行に移す機会はついに見出せなかった。にもかかわらず、昭和二十年八月から亡くなる昭和四十四年（一九六九）五月まで、一度も職に就くことなく――終戦の年の四月から八月まで、わずかに「徴用逃れ」のため内田村役場に勤めたことがある――平川は独りコツコツと作品を書き続けた。こうした平川虎臣の戦後の文学的営為を探ることを本小稿は目的とするものである。

二

終戦後の約十年間、平川は二・三の短文を除いては全く文章を発表しなかった。この時期の虎臣の生活ぶりは、長女花江さんの「刊行に寄せて――父の思い出――」、二女菊世さんの「父・平川虎臣の思い出」、また未亡人サキ子さんの「夫・平川虎臣のこと」などに点綴⁵⁾されていて、彷彿とすることができると。たとえばサキ子夫人は次のように言う。

戦争を境にして、熊本へ帰った平川は、東京での文学界の座から影がうすくなり、文学を論じる友も少なく、淋しく見えました。生活のために雑文を書くこともなく、生活のことは考えてもいないかのようで、「今はどうであろうと、書いてさえおけば、俺は死んでも作品は残る。

そのためには」と言って、黙したままの日々がよく続き、狭い書齋にこもり、魚の釣れそうもない小川につり糸を垂れ、または山ふところにしやがみ込むのでした。

こうした平川を、農村地帯である城北の人たちは「変な人物」と見ていたようだ、ともサキ子夫人は記している。

右の文章にうかがえる状態が戦後しばらく続くのだが、昭和二十八年（一九五三）、かつての文学仲間達の同人雑誌創刊に加わり、約十年間の沈黙を破る契機を得た。五月、『文学無限』が、安部宙之介、泉本三樹、酒井龍輔、埴原一丞ら、それに平川を同人として創刊された。その創刊号に虎臣は「挨拶」と題したエッセイと、『鬪鶏』という小説とを寄稿した。サキ子夫人の回想に言う、「書いてさえおけば、（中略）作品は残る」との自持のこめられた言葉の実践がここに始まる。かつ又、この後十二年にわたる平川の戦後小説の世界が、文壇や商業文芸誌とは無関係の場所でも繰りひろげられていく。その世界は、戦争前のどこか牧歌的な趣きを残しながら愛の問題、孤独の問題、人間の運命の問題を書き綴ってきた平川作品とは大きく様相を異にしたものであった。

戦後、急速に様変わりしていった農村社会を舞台とし、内面の荒廃をかかえこんだ人間、虚無と絶望と自棄とにつき動かされる人間、荒唐しいエネルギーを噴出させる人間といった姿として描き出していく。この平川の変貌は、まさに戦前と戦後の世相の変転、あるいはそれを反映した文学の世界の変化とパラレルとも言えるのだが、平川の場合、

かなり極端な形であらわれて出たとと言えるだろう。

戦後の平川の心を占めたもの、十年の沈黙を破って再び彼をして創作へと向かわせたもの、そしてまた、作品を通して彼が訴えようとした事柄といった諸点について、『鬪鶏』を通して少しく考えてみたいと思う。

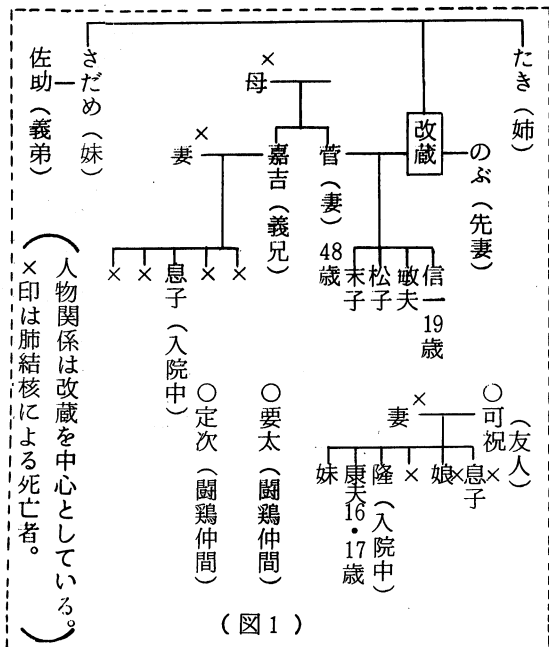
三

前述したように、小説『鬪鶏』は、『挨拶』という短文エッセイと共に『文学無限』創刊号（昭和28・5）に発表された。文字通りの△挨拶▽といった内容のエッセイは、『鬪鶏』でもって自らの△戦後文学▽を開始した平川の心境が実に率直にあらわれている。東京から郷里に戻って、「足かけ九年筆を断つてくすぶっていた」と書き起こし、「ながい悪夢をみた気持」であると述べている。自分は「孤独な一人の田舎者だ」が、ようやく今、「今度こそ生涯真剣に書きぬけるだろう」時機を迎えた、との決意をこの文章で洩らしているのだ。

ここで、重要なことは、平川が自分の眼の位置を「孤独な一人の田舎者」と定めた点である。『鬪鶏』に始まる作品群はすべて「孤独な」「田舎者」の視点で貫かれている。極端に言うならば、この視点を手に入れるために「足かけ九年」を要したのかも知れない。「呆然と放心して、誰にも出来ぬ大変な贅沢な時間を使つたようにも思われる」との言葉も、そう考えてみれば、平川の実感であったとみなせよう。この平川の視点がどのように作品においては生

かされていったのであろうか。

『鬪鶏』は七章から成る短篇小説である。五十歳代半ば位の改蔵が主人公であり、三十年間ハワイに住み、一昨年この村に帰ってきた寡婦である姉のたき、妻菅、友人の可祝の一家、妻の兄の嘉吉の一家、それに鬪鶏仲間の要太、定次といった人物が主な登場人物である。短篇小説の割には人物関係がやや複雑であるので、左に、図1として表示しておきたい。



簡単に各章に記されている出来事と記述とを迫って、作品の概要をつかんでおこう。

第一章は、四月半ばのある日、自宅で改蔵が近づいてきた鬪鶏のための軍鶏を眺めている場面から始まる。ここで、作者は改蔵の肉体的な特徴を詳しく描き、その風貌を浮きぼりにしていく。彼は、「背丈が五尺八寸もあ」り、「いったいの感じが骨張つて見え」る男である。また、「広い額」「黴んだ大きな唇」「陽焼けした頸筋」の持ち主で、「半小作の貧農」ではあるが、どことなく不気味さ、奥行き、深さを秘めた雰囲気漂わしている人間だ。そこで蛇が軍鶏を襲うという小さな事件が起り、その「軍鶏と蛇との鬪争」に対して「異様なかがやき」に眼を輝かせ、「異常な情熱」を注ぎこんで見つめる改蔵に、姉のたきは「恐怖の念」すら抱くことなどが述べられている。

第二章・第三章は、改蔵の友人可祝の息子康夫が椎茸を盗むという事件を設定し、それを通して、可祝や要太、定次といった作品の主要人物を登場させている。また、嘉吉一家、可祝一家の人間達が、ここ二十年ばかり「肺病に祟られ通し」のさまを語っている。改蔵の「鬪鶏仲間」の要太は、「鬪」屋であり、「ひねくれた凶暴性」の持ち主である。村の人間も彼を嫌ってはいるが、鬪ブローカーとしての彼の才覚に頼らざるをえないところがあって、公然と嫌悪を表わすことができない。が、この要太も改蔵にだけは頭が上らず、いつも彼に対しては「苦手」意識を持っている。定次も要太と同じく「鬪鶏仲間」であり、彼は「鶏の仲買」を業としている人間だ。可祝は改蔵の「竹馬の友」と説明されている。

第四章・第五章は、前章と同じ夜、改蔵宅にて改蔵、たき、要太、定次が「花を引い」ている場面。小金を貯えてハワイから帰国したときの心の中が叙述される。自分が金を持って帰ったばかりに、弟改蔵の妻や実の妹までもが、金目あての態度を取り、彼女はそのため「自分の金を悲哀の思いで眺め」ざるをえない。そして、強い「孤独に苦しめられ」るのである。が、改蔵一人は彼女の金に全く頓着する様子はうかがえず、そのことがわずかに慰められるのである。四人が花札の勝負に夢中になっているところへ義兄の嘉吉がやってくる。花札は、まわりの人間には改蔵が「捨身」としか見えないやり方で大きく沈み、また次第に持ちなおすといった動きの激しいものであった。嘉吉一家と可祝一家とは、村の中でこの二軒だけが肺病に徹底して崇られていた。嘉吉の方が六人、可祝の方が四人をすでに肺結核で家族を失っており、しかも、両家とも現在、残っている跡とり息子が同じ病いで入院中という有様なのだ。にもかかわらず、嘉吉と可祝とはお互いに激しく憎しみあっており、「暗闘」が二人の間にはくり広げられている。その中で改蔵は、嘉吉を嫌う。

第六章になって、「改蔵の過去」が説明される。改蔵には、かつてのぶという妻がいた。しかし、六・七年連れそった後、二十一年前に彼女は急性肺炎で死亡したのである。その一年後に、今の妻菅と再婚した。菅は家庭の事情もあって「婚期を逸し」かけており、改蔵のところに嫁いだ時は二十八歳になっていた。二人の間にはしばらくは平穏な日

々が続いた。ある時、改蔵は「自分は死んでいる！」との思いに襲われた。先妻の「のぶと一緒に自分のいのちも滅びていた」という感慨にとらえられる。菅の「嫉妬」、改蔵の菅に対しての「済ま」ないと、の気持が記される。一方、菅の兄の嘉吉と自分の友人可祝との不仲を見るにつけ、「人間の最も醜い暗闘」に改蔵は心を暗くし、「厭な息のつまる思い」を抱かざるをえない。

こうした第一章から第六章までの話があって、最終章、第七章のクライマックスが設定される。一章から五章までの作品的現在時から二日後のこと。「鬪鶏が行われた日」である。鬪鶏とは、この地方では鬪鶏賭博のことを指すという。鬪鶏の行われる場所、賭博の方法、さらに鬪鶏の描写がなされる。そこで、改蔵は自分の軍鶏の戦いが近づくにつれ、頭痛がひどくなってき、ついに意識を失う。おそらく脳溢血かなにかの発作に襲われたのであろう。そして彼の「息が絶え」るところで作品は閉じられている。

四

長長と作品の梗概を記したが、これは現在「鬪鶏」が『文学無銀』という同人誌の創刊号においてしか読むことができないといった事情のあるためである。『平川虎臣作品集』の出版元である武蔵野書房の企図する『平川虎臣戦後小説集(仮題)』の刊行が、もし実現したあかつきには、このようなストーリーの説明は不用となるだろう。この点を了承していただきたく思う。

さて、この『鬪鶏』は何を述べようとした小説なのであろうか。できる限り作者の意図を推察するといった観点から考えてみると、次の三つのことがらがうかびあがってくる。すなわち、(1)改蔵という人間像の提示、(2)花札や鬪鶏といった賭博の場での人間のエゴの発露、(3)戦後の農村における闇物資の供出によるかりそめの好景気と農地改革による新旧勢力の交替の三点である。

まず、(1)の問題。改蔵の人間像は、この作品の中で最もわかりにくいと言える。あるいは、彼は作者の意図にもかかわらず、十分に形象化のなされなかつた人物なのではないだろうか。軍鶏と蛇との鬪いに異様なほど関心を寄せ、花札においても一か八かの「捨身」の勝負をかけた彼が、嘉吉と可祝との長年にわたる憎悪のぶつけあいには、心底まいてしまっている。また、先妻を亡くしたことからくる暗黒・虚無をかかえこんだ彼の心のうちも、それがいま述べた勝負事に自らを投げこみ、かつ彼をとりまく人間の鬪いに「息のつまる思い」を抱く心とどのようにつながっていくのか、また、それら相互の間の関係がどのような構造になっているのか、作品では十全に語られていない感がある。これらが改蔵の心の底のわだかまりとして重く存在していることは理解されるのであるが。

中山秀人氏は、改蔵について、「農村の戦後風俗をいろいろどった『鬪鶏』に興ずるニヒルな人物」と評している⁶⁰。たしかにその通りと言えよう。が、この「ニヒルな人物」の内実について、作品を通して把握しようとして試みてもなか

なかに困難である。あるいは、それは『鬪鶏』一作をもつては不可能なかも知れない。戦後小説全体を論じた上で、作家論的に捉えなければならぬと思われる。ともあれ、改蔵は統一ある人生観、世界観の持ち主として造型されていないし、ある主義、主張に貫ぬかれた人間として描かれているようでもなさそう。また、その人間像は不鮮明と言えるだろう。不鮮明ながらも私なりにまとめてみると次のようになる。すなわち、主人公改蔵は、自分をとりまく人間と、戦後の農村社会といった環境に対し、憤り、虚無、鬪争心を抱いている。また、彼の心の奥底には愛する人を失ったことからくる人生の喪失感もある。いわば、改蔵は混沌とした心の鬱屈をかかえこんでおり、それを一つのものとしてまとめ、吐き出すすべを持つことなく、生きかっ悶死していった人間とみなせるであろう。

こうしてみてみると、(2)の問題も、当然、いま述べた改蔵の人間像の問題に含まれてくると思われる。と共に、鬪鶏という洋の東西を問わず、また古代から広く人人に愛好された競戯、花札という遊びなどが金銭を賭しての人間の欲の角逐を煽り、エゴをむき出しにするさまを作者は見すえていたと言えるだろう。これは(3)の戦後数年の間の農村の混乱ともまた関わる。農地解放(昭21)のもたらした複雑な農村での様相は、もちろん、この短篇小説で追求された問題ではない。が、それを背景に置いて各人物達が暮し、活動していることは間違いないのだ。

紙幅に余裕がなくなったので、以下、簡単に問題点をま

とめておこう。作者の意図にそって、一応、論点を三つに絞ることができると思われたのだが、意図とは無関係に、読者にとって強い印象を与える事柄として肺結核による死の問題がある。二十年近くの間、改蔵の身近かな十人の人間が亡くなるといった病魔の激しさは、この期、まだ肺結核が農村（に限らなかつたと思われるが）において「死に至る病」であつたことを表わす。つまり、農村を侵蝕する病氣の問題を、平川の筆は巧まずも捉えていると言えようか。平川作品にしばしば描かれる妻に先立たれた男の悲劇は、こうした幾多の死を突見したところから来るものであるかも知れない。

さらに、これは今後の課題となるが、第四章、第七章冒頭部などにみられる自然描写の冴えと、また一方、人物を叙述する際の説明不足、筋の展開に性急なあまり、描写が不十分になるといったところなど、さらに文体や表現の問題などが挙げられよう。今後論じられなければならないと思う。

ともあれ、平川虎臣は彼自身の戦後をようやく小説として公にし始めた。のちに、「人間生活の自然を追究する決心をかためた」と述べるのであるが、彼がこの後表現していった「自然」は、あまりにもすさまじい「自然」である。その幕開けとなつたこの『鬪鷄』では、平川は凄絶な「人間生活の自然」を控え目に提示した。平川虎臣のかかえこんだ虚無は、この後に展開されていく長短篇の作品世界において、激しく吹きすさぶ風となつて読者をゆさぶつてい

くのである。

注(1)『平川虎臣作品集』所載、沢田博編。平川虎臣作品集刊行会編、武蔵野書房、昭59・6刊。

(2)『東京朝日新聞』〈文芸時評〉、昭和十三年十月一日、二日。

(3)金原左門・竹前栄治編『昭和史』二二三頁(「決戦下の声なき声」広岡守徳筆)、有斐閣、昭57・6刊。

(4)注(1)の「年譜」による。前掲書。

(5)『平川虎臣作品集』所載。前掲書。

(6)「平川虎臣―その作品と生涯―」『国語研究紀要』第二十号所載。熊本県高等学校教育研究会国語部会、昭61・10刊。

(7)『大百科事典』「鬪鷄」の項。平凡社、昭60・3刊。

(8)平川虎臣の随筆『新自然主義の推進』、『文芸復興』所載、昭36・6刊。

(本稿は、昭和六十二年六月十三日の平川虎臣研究会における口頭発表に加筆したものである。)